増補補訂版 国語待遇表現体系の研究　近世編

主要目次

はしがき
凡例
総説……一
第一編　江戸前期（上方）の待遇表現体系……五七
第一章　序説……五九
第二章　対称の主体待遇表現……七〇
第三章　他称の主体待遇表現……二〇七
第四章　自の主体待遇表現……三〇〇
第五章　関係待遇表現……三四七
第六章　対者待遇表現……三九三
第七章　ののしり表現……四一五
第八章　感動詞の体系……四三五
第九章　接頭辞「御」（お・ご・おん）……四三六

第十章　助詞の待遇表現……四五六
第十一章　待遇表現体系の応用……四八一
第十二章　位相と待遇表現……四九六
第二編　江戸後期（上方）の待遇表現体系……五七三
第一章　序　説……五七五
第二章　男性語の待遇表現……五八一
第三章　女性語の待遇表現……六四三
第四章　遊里ことばの待遇表現……六六〇
第三編　室町時代の待遇表現体系……七〇三
第四編　近世待遇表現体系の推移……七五九
第一章　序　説……七六一
第二章　体系内の変化……七六五
第三章　体系間の変化……七九二
第四章　人称の問題……七九九
補説　近世語の品格……八〇五
語い索引……八二三
資料索引……八三一

細　目

総　説

一　待遇表現と待遇法……三
1 主体……三
2 場面……四
3 素材……五
二　待遇表現体系……六
1 内部機構……六
2 平常語……九
3 主体待遇表現……一三
4 待遇語一語一語の研究……一三
三　待遇表現研究略史……一三
1 敬語研究史……一四
2 待遇表現研究史……一九
四　近代語と近世語……二四
五　研究法……二六
1 外的身分関係による帰納法……二八
2 共用例による判定法……四〇
3 呼応対応による研究法……四一
4 「待遇語の対応」の研究史……四六
六　近世封建社会と待遇表現……四九

第一編

第一章　序説……五九
第二章　対称の主体待遇表現……七〇
第一節　語群の設定……七〇
一　「給ふ」一類を中心として……七一
1 「させ給ふ」と「給ふ」……七三
2 「給ふ」と「やる」……七六
3 「しやる」……七八
4 「やる」……七九
5 平常動詞……八〇
6 のしりことば……八一
二　「て下さるる」の一類……八一
1 て下され（り）ます……八二
2 て下さるる……八三
3 てたまはる……八三
4 てたもる……八四

第一章　序　説

「江戸前期」というのは、通説に従って江戸開幕より宝暦までを指す。この時代は普通さらに二分せられる。この細分は何時を境とすべきかは未だ分明でないが、前半は中世からの過渡期であると考えられ、江戸時代語の姿があざやかになるのは後半に入ってからである。そしてこの後半を代表するのが元禄期である（国語学会編「国語の歴史」）。

こうして江戸前期の待遇表現の体系を究明する第一の目標は元禄期の体系であることになる。

さて元禄期の言語資料としては、笑話・歌舞伎脚本・浄瑠璃・浮世草子・歌謡集・説教集・講義講演の筆記などがある。しかし複雑な待遇表現の体系を究明するに望ましい資料の条件は

㋑　多様な人と人との関係を内包していること。

㋺　多様な位相を示していること。

この観点で右の資料の中から選択するとなると歌舞伎脚本や、浄瑠璃わけても世話浄瑠璃が好資料である。そこで本論の基礎資料として近松の絵入狂言本二十四篇と世話浄瑠璃二十四篇を取り上げて出発することとし、その他の資料を出来る限り広く使用することにした。そして結果的には次に示した諸書を資料とすることとなった。なお底本として使用した近松歌舞伎狂言本は絵入狂言本である。もちろん、絵入狂言本は台帳と異なり、読みものであるから、口語資料として欠点も多いし、又高野辰之氏校訂の「近松歌舞伎狂言集は」、卜書と白の区別のない原本の形を台帳風に書き改めているので、その書き改めにもあやまりがある。この期のよりよい資料としては、宝永七年正月大阪萩野八重桐座上演の世話狂言・「心中鬼門角」、その奥書に「今まで狂言本数多出ると雖も、九牛が一毛にて、一つとしてあやまち聞こえず、此度出す